

問一

人は体験を語る際に、真実の姿に直面することに耐え切れず自己を美化しようとするが、そうした自己の欺瞞的なありようをもなんとか隠し通そうとするということ。

（解答欄 3 行）

問二

目を背けたい弱点を含め、自己の真実の姿を直視する人は、それによって得た、いかなる人にも通底する人間の苦悩を弁え、他者の弱点を痛烈に指摘できるということ。

（解答欄 3 行）

問三

劇を見る人が、自分のあわれさに向き合うことなく他者の運命をあわれみ酔うのと同様に、自己の真実の姿に無自覚であるからこそ、弱点を含めた人間の真実を描いた小説を面白がって書いたり読んだりできるということ。

（解答欄 4 行）

問四

体験の美化や隠蔽を指摘し顕わにする小説が、人の真実の姿をさらせばさらすほど、人生とは不幸なものでしかないという決定論に陥ることに、虚しさを感じたから。

（解答欄 3 行）

問一

光りと闇とが醸し出す陰翳ある世界は日本の美を生み出す文化的土壌であるばかりか、その陰翳の作用は、人間精神全体にとっても重要な役割を担うという意味で。

（解答欄 3 行）

問二

人間の幻覚を誘う陰翳のある闇こそ妖怪たちが跳梁する世界であるが、近代化にともなう明るい電灯の普及と管理の浸透によって、そのような闇の領域が消失したから。

（解答欄 3 行）

問三

大正時代には、前近代が抱えもっていた深い闇の恐怖空間が大人の心のなかにも息づいており、明暗が漂う当時の童謡はそうした感性を共振させるものであったから。

（解答欄 3 行）

問一

どうして昔の人は、今の私たちが使う意味での「せめて」という言葉がなくても不自由なさらなかったのか。

（解答欄 2 行）

問二

恋しい女の顔を見たいのが本心であるが、それができないので、せめてその代わりに恋しい女の住んでいる家だけでもずっと見ていたいのにといい気持ち。

（解答欄 3 行）

問三

ある意味を表す言葉が昔はないと思われても、昔の人は、今の人には想像できない言葉でその意味を表しているし、逆に今の人は、ある古語の意味を昔の人には想像できない言葉で表している場合もあるだろうということ。

（解答欄 4 行）